

「主を賛美するために」

詩編 102 編 19 節

キリスト教センター事務室マネージャー 松田 慶光

今年の5月に、ある留学生から質問をいただきました。「どうして礼拝するのですか。」その問いは、ある留学生クラスの日本語作文の課題の一環として、大学にあるいくつかの部署の職員にインタビューを行うというものでした。「どうして礼拝するのですか」という質問に対し、私は「礼拝を通して、神様からいただいている恵みを知ります。そして、その恵みに応えるために賛美をささげているのです」と答えました。

しかし、その後「どうして礼拝するのですか」という質問は、この奨励をさせていただくことになってからも、たびたび心の中に立ち上がる問いとなりました。私たちはなぜ、礼拝をするのでしょうか。キリスト者と呼ばれる人たち、神様を信じる人たちはなぜ、神様を礼拝し、賛美するのでしょうか。

今日、与えられた聖書の箇所は、「詩編」と呼ばれています。調べてみますと「詩編」とは、ギリシア語の「ブルサモイ」という言葉からきていて、もともとは弦楽器の「奏でる」という言葉です。奏でる、と聞くと美しい音色や整った旋律、素晴らしい響きを想像しますが、聖書の詩編にはいたるところに美しいというよりは、悲しみや嘆き、人生に対する憂いが描かれます。詩編 102 篇 1 節には、このように記されています。

祈り。心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の詩。

この詩篇は、心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の詩なのです。当時、詩篇作者が置かれていた環境はとても悲惨なものでした。紀元前 6 世紀、自分の国が強大な帝国に攻められ、シオンと呼ばれる「神様を信じる国」はほろぼされ、捕まえられて、人々は囚人として暮らしていました。それまで大切にしてきた自分たちの国の文化に、少しずつ自分たち以外のものが入り込む。言葉が変わる。食べ物が変わる。新しく生まれる子どもたちに、これまで聞いたことのない名前が付けられる。そんな変化の中で、自分たちは一体何者なのか、何のために生まれ、何のために生きているのか。一体いつになったら、昔のように祖国に帰り、昔のように神様を礼拝することができるのか。そのような葛藤、悲しみ、苦しみの中でこの詩編が紡がれます。まさに、心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す、貧しい人の詩なのです。

私たちは今、日本で、この 2024 年という年を生きているという意味では、なかなか自分の国が滅

ぼされ、敗戦国の民としてどこか別の国に連れて行かれ、働かされるということに実感が湧かないかもしれせん。しかしながら、何か、自分がそれまで大切にしてきたものが壊れていく、壊されていくという経験をしたことが皆さんには無いでしょうか。それまで信じてきたものや大切にしてきた考え方が否定されたり崩されたりして、自分自身の無力感や、自分や他者に対する不信感、堂々巡りの思考、解決しようとするほどに自分や他者を傷つけてしまう、という経験はないでしょうか。

今から30年以上前の1989年、私が小学校4年生だった時、テレビで不思議な光景を見ました。人々が何か、熱狂的な声と表情で手に道具を持ち、懸命に壁を壊している様子でした。アナウンサーの言葉も早口で、一体何が起きているのか分かりませんでした。とにかく人々が皆で壁を壊しながら叫んでいるのです。後になって、あれはベルリンの壁だということが分かりました。東ドイツと西ドイツを隔てるための壁を市民が壊していたのです。

続く1995年には、阪神淡路大震災と宗教団体による地下鉄サリン事件が起こります。1997年には絶対に潰れないと言われていた証券業界の大手である山一証券が倒産しました。1999年には生徒が安全であるべき学校内での事件、コロンバイン高校銃乱射事件が起きました。国も、土地も、宗教も、経済も、学校も、何一つとして確かなものなど無いのだ、移ろう影のようなものだ、10代の私が学ぶには十分すぎる出来事でした。

大学3年の時、聖学院大学での授業をきっかけに、教会に行きたいという思いが与えられました。2000年11月15日(水)3限、7401教室で受講した「キリスト教人間学」の授業で、ラインホルド・ニーバーの祈りに出会い、その日初めて、祈禱会でお祈りをしました。こんな祈りです。神様、私は人間を超えた存在を求めてきました。あなたがその神様であるなら、どうかそのことを信じる信仰をください。そう祈りました。それは、素晴らしいクリスチャンの整った祈りではありませんでした。当時の私は自分の惨めさでいっぱいでした。人を許せない思い、愛せない悲しさ、確かなものなどない、という不安の中で、心挫けて思いを注ぎ出す、まさに貧しい人の祈りでした。しかし神様は、そのような者を招かれます。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである(マタイ 9:12-13)」とイエス様は語られます。「どうして礼拝するのですか」という問いの中で、聖書の言葉に向き合うとき、私は一つのこと気が付きます。「どうして礼拝するのか」という問いは、神様の言葉の前に、聖書の前に、「どうして神様は私を礼拝するものとして招いてくださるのか」という問いに変えられていきます。自分が礼拝する目的よりも先に、自分を招く存在があることに気付かされるのです。詩編作者も、自分自身の惨めさから顔を上げ、神様の確かさを、神様の強さを、神様の栄光を思うとき、はじめて自分たちが生かされていることの意味に気が付きます。そして、こう謳うのです。「主を賛美するために、民は創造された。」

最後に、詩編102篇13節から19節をお読みして、この奨励を終わります。

主よ

あなたはとこしえの王座についておられます。

御名は代々にわたって唱えられます。
どうか、立ち上がって
シオンを憐れんでください。
恵みのとき、定められたときが来ました。
あなたの僕らは、シオンの石をどれほど望み
塵をすら、どれほど慕うことでしょう。
国々は主の御名を恐れ
地上の王は皆、その栄光におののくでしょう。
主はまことにシオンを再建し
栄光のうちに顕現されます。
主はすべてを喪失した者の祈りを顧み
その祈りを侮られませんでした。
後の世代のために
このことは書き記されねばならない。
「主を賛美するために民は創造された。」

(祈り)

お祈りします。みなさんも目を閉じて、黙禱の姿勢をとっていただければ幸いです。
天の神様、今朝も私たちを礼拝するものとして、賛美するものとして集めてくださりありがとうございます。
どうか私たちの日々の歩みが、自らの計画を超えて神様の導きのもとにあることを信じる信仰を与えてください。
主の御名によって、祈ります。アーメン

2024年6月20日 聖学院大学全学礼拝